

(9) キウイフルーツ

時期	対象病害虫 指定有害動物	防除法	注意事項
			<p>○ 指定有害動物に指定されている対象病害虫については、千葉県総合防除計画も参照の上、防除を行う。 (https://www.pref.chiba.lg.jp/annou/shokubo/sougouboujyoikeikaku.html)</p>
休眠期	果実軟腐病	・ 枯枝の剪除	○ 冬期の剪定時に伝染源となる枯枝を剪除する。
	花腐細菌病	・ カスミンボルドー/カッパースィン水和剤 又はZボルドー	○ 雨よけ栽培をすると花腐細菌病の発生は軽減される。
発芽後叢生期まで (4月上旬～中旬)		・ カスミンボルドー/カッパースィン水和剤 又はZボルドー	○ 叢生期とは新梢長約10cmまでを指す。 ○ 発芽期以降のボルドー剤の散布には、葉害軽減のためクレフノン(炭酸カルシウム水和剤)を加用する。
開花約1か月前 (4月下旬)		・ 樹勢に応じた主幹や主枝の環状剥皮	○ 剥皮の幅は5～10mm程度で、深さは木質部をやや傷つけるまでとする。
花蕾が見えるころから開花直前 (4月中旬～5月中旬)		・ カスミン液剤	○ カスミン液剤は花蕾に十分にかかるように散布する。
開花期 (5月上旬～中旬)	キウイヒメヨコバイ	・ サンマイト水和剤 又はパダンSG水溶剤	○ 6～9月に多発した場合、随時防除する。
幼果期～果実肥大期 (6月～7月)	果実軟腐病	・ 剪定枝の埋没又は処分 ・ フロンサイドSC 又はロブラール水和剤 又はベルコート水和剤	○ 新梢管理(剪定)を行い、棚下の通風、採光を図る。
6月上旬～9月 (対象害虫発生時のみ)	カメムシ類	・ テルスターフロアブル 又はダントツ水溶剤	
	クワシロカイガラムシ	・ トランスフォームフロアブル 又はアプロード水和剤 又はコルト顆粒水和剤	○ アプロード水和剤はカイガラムシ類幼虫の登録。
	キウイヒメヨコバイ	・ モスピラン顆粒水溶剤 又はコテツフロアブル	
収穫後	果実軟腐病	・ 貯蔵温度は2℃ ・ エチレングラス処理温度は10～20℃ ・ 追熟温度は5～15℃	<p>○ 収穫した果実の貯蔵はエチレン吸収剤を入れ、2℃の低温条件下で行い、菌の増殖を抑える。 ○ エチレン処理は、50ppmで24時間行った後、適度な軟化程度になるまで1～2週間保管してから出荷する。 ○ 20℃以上の高温で長く貯蔵すると軟腐果の発生が多くなる。</p>
夏～翌年春	コウモリガ	・ ほ場内及び周辺の除草 ・ 幼虫の捕殺及び刺殺	<p>○ 5月ごろふ化した幼虫が、草本植物で生育した後、6～7月に幹の地際部、枝の分岐部等に食入し、翌年蛹となり、秋に成虫が羽化する。 ○ 刺殺は、幼虫食入部から孔道に太い針金を挿入し、中の幼虫を刺し殺す。</p>

農薬登録情報（農薬名順）

- ・ [殺菌剤](#)
- ・ [殺虫剤](#)
- ・ [展着剤及びフェロモン剤](#)

農薬登録情報（RACコード順）

- ・ [殺菌剤](#)
- ・ [殺虫剤](#)
- ・ [展着剤及びフェロモン剤](#)

かいよう病発生園における防除

病害虫	防除法	参考事項
<p>かいよう病 (Psa 3 系統)</p>	<p>(耕種的・物理的防除)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 健全な苗木や穂木を使用する。受粉には清浄な花粉を使用する。 2 管理は未発病園や健全樹から行う。 3 園地へ入る前には70%アルコール溶液で手や靴などを消毒する。 4 ほ場の見回りにより早期発見に努め、発病した部分を切除、伐採する。 <ul style="list-style-type: none"> ・「ハイワード」で樹液漏出が見られる場合には、漏出箇所から褐変が見られなくなる位置までさかのぼって枝を切除する。葉の発病が見られる場合には前年枝基部まで、新梢の枯死が見られる場合には前々年枝基部まで切除を行う。主幹や骨格枝の主幹付近で菌液を含む樹液の漏出が見られる場合は、主幹を伐採する。 ・「レインボーレッド（紅妃）」、「Hort16A」などの二倍体黄色系品種は被害が大きく、被害枝を切除しても再発病を繰り返して枯死に至ることが多い。このため、発病を認めたら台木まで切り戻すか伐採・抜根する。 5 切除を行うときは、切り口にトップジンMペースト原液を必ず塗布して感染を防止する。作業に使用した器具類(ハサミ、ノコギリ等)は、樹ごとに70%アルコール溶液や有効塩素濃度 0.02%以上の次亜塩素酸ナトリウム水溶液で必ず消毒する。休眠期にせん定を行う時も同様である。 6 切った枝葉は園外への感染を防ぐため、園地内に埋却して処分する。これが困難な場合には、園地内において、高温処理により本病菌を死滅させるため、枝葉を集めて透明ビニルシートで覆い、シートが風雨等で剥がれないように留意し、夏季の高温期を含む 32 週以上放置する。その後処分を行う。 7 主幹ごと切除した切り口からは細菌を含む樹液が流出する。周辺の樹への拡散を防ぐため、ラップやビニルなどをかぶせて保護する。 8 萌芽期～新梢伸長期(3～6月)の展開後間もない葉や柔らかい新梢では、植物体同士の接触等により傷口ができやすいので、風当たりの強い園地では、防風対策を行う。 9 果実肥大・充実期(7～9月)には、台風に備えて防風対策を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 細菌による病害で、枝、幹、新梢、葉、蕾や花に感染して発生する(果実は発病しない)。病原菌は風雨により、樹液、菌泥が飛散し、葉や枝の傷口や落葉痕、及び葉の気孔・水孔から侵入する。 ○ 病原細菌には複数の系統が知られている。Psa 3 系統は特に病原性が強い。 ○ ハサミなどの器具類や作業者の衣服等についた植物残さ、感染樹から採った穂木を接ぎ木することによっても伝染する。また、感染した苗木の移動によって感染地域が拡大する。 ○ 2月以降、枝幹の芽の周囲、葉の脱落痕、せん定の切り口などから、白濁した菌泥や樹液が漏出し、その後赤褐色に変色することがある。4月になると、葉に茶褐色の斑点が見られ、健全部との境界が黄変する。また、伸長中の新梢では黒変したり、枯死する。 ○ 主力品種の「ハイワード」のほか、「さぬきゴールド」「香緑」「讃緑」「アップル」が比較的本病に強い。

かいよう病発生園における薬剤防除 **農薬登録情報**

・発生園地だけでなく、周辺の園地にも薬剤散布を行って感染の拡大を防ぐ

病虫害	時期	防除法	注意事項
かいよう病※	11月～3月 (休眠期:収穫後～ 発芽前)	<ul style="list-style-type: none"> この時期に3～5回、下記薬剤のいずれかを散布し、主枝や主幹部への感染を防止する。 ICボルドー66D コサイド3000 枯死枝や発病枝は除去し、切り口にはトップジンMペーストを塗布して感染を防止する。 	<ul style="list-style-type: none"> 病原菌の増殖適温は10～20℃で、この頃から菌密度が急増する。この時期からの防除を徹底する。 細菌の植物体への侵入口が生じる収穫後、落葉後、剪定前後、発芽前などを基本として定期的に散布する。病枝の切除後に薬剤を散布するとよい。
	3月～4月 (発芽後～開花前)	<ul style="list-style-type: none"> この時期には2回、下記薬剤のいずれかを散布し、葉や新梢、花蕾への感染を防止する。 コサイド3000 カスミンボルドー/銅シン水和剤 (以上、クレフノン加用) カスミン液剤 	<ul style="list-style-type: none"> 発芽期以降は、銅剤(ボルドー、コサイド)による薬害を軽減するためクレフノンを加用する。 菌密度は4月～5月に最も高くなる。 カスミンボルドー/銅シン水和剤は収穫前使用日数に注意する。
	5月～6月 (新梢伸長期～落花期)	カスミン液剤	<ul style="list-style-type: none"> カスミン液剤の収穫前使用日数に注意する。
	6月以降 (果実肥大期)		<ul style="list-style-type: none"> 気温が25℃を超える7月～10月に菌密度は低くなるが、低温や風雨によりまん延が心配される場合、コサイド3000(クレフノン加用)を散布する。 コサイド3000は薬害を生じるおそれがあるので、新梢伸長期以降の過度な連用は避ける。

※国の指定有害動植物に指定